

---

# 空の向こう

ふあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空の向こう

### 【著者名】

ふあ

### 【あらすじ】

「私ね、今日死ぬんだ」うん、私は死ぬのなんて怖くない。この世界が大嫌いだから。そんな私は最後の日、始めて「生きていたい」と願った。残り少ない時間で、ひたすらそう願った。

## 1・最後の日

コンクリートで固められた、窓も無い教室ほどの大きさの部屋には、たくさんの人が居た。大人や私より小さい子供など、パツと見て四十人程の人がその部屋に押し込められている。

それだけの人がいるのに誰も喋りもせず、微かな人の気配が感じられるだけだ。でもその雰囲気は、これから私たちの運命にはぴつたりだと思った。

私たちは、もうすぐ死ぬ。いや、殺されるのだ。でもだれもそれを咎める事は無い。これは、崇高な儀式。そう、人類がこれからも行き続ける為の儀式なのだ。……少なくともそつらしい。

ぼんやりと、私はそんなことを考える。

用意されたパイプ椅子に座つた私たちの列と向かい合つて、一人の男の人がさつきから何やら話している。ピシッ、政府のどこかの制服を着て、正面の教卓のよつた机に片手を置いて熱弁を振るっている。

なんとか集中して聞き取れたのは、あなたたちの死は無駄にはしないだとか、これは人類の為の尊厳ある死なのだと、このようないことが一刻も早くなくなるように一層科学の発展を目指すという抱負だと、そんなどうでもいい内容だった。周りを見ても、彼の話を聞いていると思われる人は見られず、誰も彼も自分の世界に引きこもつてしまつていて、ただ目の前の空中を見つめている。

だから、その人は何も無い空氣に語りかけているようにしか見えなかつた。ギャグではよく見たことがある光景だけど、今はおもしろくもなんともない。

最後に、残された家族への給付金の話で締めくくつて、演説は終わつた。

あーやれやれやつと終わつた。普段なら、ここで伸びでもするとこだが、今の状況では流石にそんな気にはならない。

いよいよだ。

列の前に長机が置かれ、列の数だけ置かれた椅子に、看護婦のような格好の女人たちが座る。私の位置は、一番右端の前から三番目のところだ。わりと、各列の先頭の様子が伺える。看護婦の正面に置かれた椅子に、先頭の人達が座り、その人たちが差し出した片腕に、淡々と、手馴れた様子で注射針が刺されていく。その様子は、今まで何度も何度かした事のある予防接種と特に変わりは無い。

やがて、私の名前が呼ばれた。

「はい」

と返事をして私は立ち上がつた。椅子に座つて右腕の袖をまくる。担当である、なんとなくプロっぽい感じがする年配の看護婦は、突き出された腕の裏側の肘辺りを指で押さえ、「刺したときちょっとちくつとするから、我慢してね」と、よく聞く台詞を言った。

基本的に私は注射が嫌いだし、ちくつとする感覚も嫌なのだが、ここまで来てそんなことは何も気にならない。というか気になるわけが無い。

私は頷いて、彼女が持つている注射器を睨みつける。細長い部分に、透明な液体が詰まっている。

注射針つて、先が斜めに切れてたんだ。今まで目をそらしていたから気付かなかつたけど、最後に知識が一つ増えたのは良かつたのかもしれない。それ以外にいいことは何一つ無いけど。

その針の先がすつと腕に吸い込まれ、すこしづつ中の薬品が押し出されて私の血液に溶け込んでいく。

これが、もうすぐ私を殺すのだ。私の命を奪う薬が、何の抵抗もなく一体化していく。

何でこんなにも落ち着いて見ていられるのか、全く持つて自分でも不思議だ。まるで他人事みたい。でもこれは、紛れも無く私の生身の腕なのだ。

脱脂綿で傷口を押さえ、再び椅子に座る。  
出血は、すぐに止まつた。

## 2・とある公園のある日の風景

一年前に買つたばかりの薄い青色の自転車は、三週間ぶりに私を乗せて、春の匂いの中を突き抜ける。

穏やかな風が、私の前髪をあおり、優しく頬をなでる。たまらなくなつて、私は小声で鼻歌を歌いながら、ゆっくり自転車をこいだ。久しぶりに見上げた空は雲ひとつなくどこまでも晴れ渡つていて、どこもかしこも自転車と同じ色に染まつてゐる。日曜日のある暖かい春の午後。春休みの一日。空は高くて、果てなんか無いみたい。こんなに空つて広かつたんだ。

今まで十七年間ずっとその下に居たはずなのに、一度もそのことに気付かなかつた。まあ、それもしょうがない。私はこの世界が大嫌いなのだから。

戦争とか飢餓とか、そんなのは昔から絶えなかつた。人災のだから、人がいる限りなくなる事は無いのかもしない。更にそれを無くす為に科学が発達して、その中身は私はよく知らないんだけど、まあいろいろあるんだろう、問題はその結果だ。医学が発展して人は死にくくなり、果ての無い人口爆発が続き、ついに世界の人口は九十億を越えた。食糧生産も追いつかず、ついに人は人を殺す事にしたのだ。

各国でそれぞれ定期的にランダムに人間を選び、一斉に死を迎える。増えすぎたから殺すなんて、何と単純明快で馬鹿馬鹿しい仕組みだらう。この私でもばつちり理解できる。そしてその記念すべき第一回目に選ばれた私は、なんと運が悪いのだろう。呆れすぎて言葉にならない。

私はこの世界が嫌いだ。

もう人間は、同種を殺さなければ生きていけないので。その時点で人間なんてもう終わつてゐる。そんな人間が作った世界がいいところなわけが無い。もし悪いところではないのだとしても、この世

界は生きにくいのだ。無理矢理周りに溶け込んでいる振りをして、作り笑顔でなんとか一日を終えて、それでも陰口や妬みなんかが尽きない世界。そんな本質に気付いたとき、私は世界が嫌いになつた。時間が経つにつれて、それは嫌いから大嫌いに変わり、そのマイナス傾向は現在進行形で続いている。

だからこの澄み切つた青空も、本当は、嫌いなもの的一部にしか過ぎないのだ。砂漠に咲く一輪の花、そう言えば聞こえはいいのかもしれない。でも、花はいつか枯れるのだ。

家から少し離れたところにある公園で、私は自転車を止めた。

「プラン」のそばにある時計を見ると、一時を少しまわっていた。話によると、注射をしてからだいたい十から十四時間後くらいに心臓に薬が効き始めて死ぬのだそうだ。勿論個人差があつて、すぐに死んでしまうこともあるらしい。十一時ごろにあのコンクリートの部屋に集まつたから、普通に考えれば、まだ半日近くある。

といつても、なんとなく来てみただけだつたから、することなんてないんだけど。

ぶらぶら散歩することにした。小さな子供達がそこら中を走り回り、もう少し大きな少年達は向こうの広場で野球をしている。すぐ側のベンチでは、女の子達がきやあきやあ笑いながらおしゃべりにいそしんでいる。

そして、その反対側のベンチでは……。

「あ

思わずそう呟くと、そのベンチで鳩に餌をやつていた少女が振り向き、

「ああ

と、似たような声を出した。

私は、肩ぐらいの黒髪で、すこし鋭い目をしたこの彼女のことを知っている。名前と同じクラスだったということを知っている。新学期になつたらクラス替えがあるので、それで元から薄い縁も完璧に切れると思われるクラスメート。もちろん、私に新学期などあり

えないわけなんだけど。

普段の、人と話すのが苦手な私なら、そこでバイバイとなるところだが、なんとはなしに、彼女と話してみよつと思った。明日がなくなると、今日の私は少し大胆になるらし。

「何してんの？カノちゃん」

「んー。鳩に餌やつてんの」

いや、見りや分かるつて。とつこむのは失礼だらうか。でも聞いた私が悪いのだらう、さつと。

「……いつもやつてるの？餌やり」

「いーや。朝のパンが残つたから、捨てるのもつたいないし」  
そう言つて彼女は、手に残つていたパンくずをくしゅくしゅと両手ですりつぶして空中にまいた。バサバサと羽音を立てて鳩のピンク色のくちばしが欠片も残さずにつまんでいく。

「終わつちやつた。何やつてんの？こんなとこで」

両手と服に付いた粉を払いながら、彼女は私に尋ねる。

「いや、ちょっと散歩をね」

「ああ、あたしと同じだ。でも物好きだね、ここなんて何も見るもの無いのに」

ちよつと考えて、私は返す。

「私ね、今日死ぬんだ」

手を止めて、彼女はこちらを振り返つた。僅かに目を見開き、二三度瞬きを繰り返すと、

「そりなんだ」

そう呟いて再び粉落としに励む。

「冗談だと思われるのはわかつていた。だけど、そりやないよ。これは馬鹿にされてるんだらうか。

「死ぬつて、どうやつて」

「えつと、安樂死だつて」

確かにそう言つてたはず。

それを聞いて、彼女はふうん、と頷いた。

「大変だね。  
まだ若いのに」

この、増えすぎた人間を減らす政策は殆どの人には知らされていない。まして、一般大衆の一人に過ぎない少女が知っているなんてありえないはずだ。やっぱり、彼女は知つてはいなかつた。喋るなとは言わていないので、私はこのくだらない儀式について彼女に説明すると、驚いたように黙つて聞いていたが、やはり私が思つていたよりも、大分反応は薄かつた。他の人に誰にも言つていないので、普通の反応がどういうものなのかはつきりとは分からぬけど、それでも彼女は不思議なくらい冷静だつた。

私は、元クラスメートのカノという少女と、道を歩いている。ろくに話したことも無い、きっと死ぬまでそうだろうと思つていた彼女と今一緒に散歩をしているというのは、なんとすゞい偶然だろう。やっぱり人生は何があるか分からぬ。

「家に居なくていいの？」

「いいの、最後の日だからこそ普通にしたいから」  
家にこもつていたら、よけいな事を考えてしまいそうで怖いというのもあつたが、すぐに弱みを見せることに気がのらなかつたので言わない。あまり親しくない人に弱音を吐くのは、やっぱりなんだか気が引ける。これが先ず私の人当たりが悪い理由なんだろうけど。

「家族とかは？」

「普通にした方が良いつて、家族から言つたんだ。だから」

「そうなんだ。優しいんだね」

その言葉に少し誇らしくなつて、そうかな、と言いながら曖昧に笑つた。

左手にある公園の桜並木がある。そこから、たくさんの桜がそれの枝を伸ばして、道を行く人々につぼみや、今年始めて咲いた花を見せ付けている。まだ三割ほどしか咲いていないけど、来週にはきっと半分は咲くだろう。新学期になれば、きっと満開だ。

……私には、関係ないことだけ。

「あー、桜が咲いてる」

私の視線に気付いて、隣の同級生が間延びした声を上げた。

「今年は遅いね。去年は終業式には半分くらい咲いてたのに」

「でも、新学期には全部咲きそうだ」

いや、私はそのころにはいないんですけど。

「満開になつたときに、突風でも吹いたらすごいきれいだよね」

「でも突風なんて吹いたら全部散っちゃうよ」

「散っちゃうけどさあ。でも、なんか風が目に見えるみたいでおもしろくない?くるくるなつてたりしてたらもつと

いや、また一年待たないといけなくなるのに」

そう言おうとしたが、彼女の子供みたいな笑顔を見ると、そんな突っ込みはどうでもよくなつた。

「どうか、こんな笑顔だつたんだ。

私が普段見るカノという少女は、あまり人と関わらない子だ。休み時間などに皆が塊をつくつて、私がそこに必死でしがみついているときでも、平気で一人でいられる。みんなは変わった子だと言つて、私も少しそう思つていたりしたけど、一人でいても平気な彼女をうらやましく思つたりもした。

みんなの側にいても常に一人ぼっちだという感覚が付きまとい、それでも明日も仲間に入れてもらう為に、みんなと同じタイミングで笑顔を作つたが、それは私の神経を大分すり減らし、私は一人でいられる彼女の勇気が、うらやましかつた。彼女はたいてい独りでいた。

だから、今すぐそばにあるその笑顔はとても新鮮だ。つくりものだという感じがなくて、あどけない、こんな顔で笑える子を私はとつさに脳内で検索したが、該当する子は誰一人見当たらない。

「そういえば、宿題終わつた?」

突然彼女が言つた。

「え、宿題?」

私がやつても意味がないだろ？

「終わってないよ、いや、私がやつてどうするの」

「なんで？……あ、そっか」

これがわざとなら流石に Pratt きていただろ？が、その顔からは全くそんな気配は感じられない。これが演技なら、まさに神だ、といつぐらいきよとんとした顔をしていく。

「そつかあ、『めん』『めん』

そう言い、右手の指を揃えて手を縦にして『めん』のサインをしながらすまなさそうに言った。

これは、忘れるようなことなのだろ？が。攻める気はないけど。

「どう思つてゐるの？」

しばらくして彼女が言った。

「何が」

「死ぬ」と。嫌じやない？」

「だつて、もうしようがないし」

それに、と私は付け足す。

「私、ここで生きるのもう疲れたんだ。」

「疲れたの」

「うん。何ていうのかな、こんなくだらないことをするぐらいの人間は末期でさ、そんな人間の世界で生きるのに疲れた。もう笑わないでいいなら、いつそ楽かな」

「笑いたくないの？ 何で」

「ああ、彼女はあまり笑わないから、分からぬのかな。

「作り笑顔とか。みんな集まつて笑つてたりするでしょ、でもあれつて本当に楽しいのは一部の人だけで、私みたいに不器用な人は周りで楽しいふりをしてるだけでさ。結構疲れる」

「何で不器用なんて言うの」

「私ホントは、騒いだりするのは苦手なんだ。本読んでたりするほうが楽だし。みんなの中に上手く入りたいけど、不器用だから上手くいかないんだ」

「こんなに本音を言えるのは、これが最後の日だからだろうか、それともあまり知らない彼女だからだろうか。

「だから、正直カノちゃんがうらやましい」

「へ？ あたしが？」

「ふいをつかれてつい声が裏返つてしまつた彼女に、私はつくりも

ので無い疲れた笑顔を向けた。

「一人で平氣でいられたら楽だなあつて」

「これは失礼かもしねえ。

そう思つたが、私の氣を使う神経は、磨り減りきつて使えなくなつてしまつたみたいだ。

彼女も、つくりものでない笑顔を向けた。

「あたしも、うらやましかつた」

それを聞いて、一瞬思考が停止する。

何が、と言つと、私の名前が出される。

「あたしね、あまり平氣じやないんだ。でも、みんなのとこに入るにはどうしたらいいか分からなくてね、しじつがないからずっと独り。みんなのとこにいられるのがうらやましい」

「……そうだつたんだ」

うらやましいなんて言われた覚えがないので、私は死刑宣告された日から一番驚いた。一度頷いて、彼女は私の言葉を肯定した。

やつぱり、寂しかつたんだ。

「上手くいかないよ、ホントに」

「だね」

今度は私が頷く。小ちく隠りながら伸びをした。

「あーあ、もうやんなつちやつた」

「やつぱり死ぬのは怖くないんだ」

全然、と言いながら、私は作りものでない筈の笑顔を浮かべる。

「じゃあ本当に嫌いなんだ。この世界が」

「カノちゃんは嫌にならないの」

「あたしは……」

あー、と何か考えるような声を漏らし、最後に一度くしゃみをしてそれについては何もふれずにしゃべりだす。

「まだいいかな。あたしもこの世界は全然好きじやないし、むしろ嫌いだけど。でも、まだここで生きられないぐらじやない」

「死にたいとか、思わない?」

「そりや思つたつするけども、でも、諦められないし」

私は首を傾げた。

上手くいかなくて、むしろ嫌いなものなのに、どうして諦められないんだろう。なんで絶望してしまわないのか、私には考えても分からぬ。

「何で」

「つー、何でだら」

眉間に容赦なくしわを寄せ、上田遣いに前を睨んで考え込むのを、わたしはただ黙つて眺める。私の質問にこんなに悩んでいるのを見て、彼女には悪いが、暖かさを感じて思わず微笑んでしまいそうになる。

ようやく、彼女は口を開いた。

「確かに、苦しいこととか、息ができないくらい辛いこともいつもはある。でも、そんなにひどくないこともちょっとはあるかひむ。そのちょっとがあるから、あたしは諦められない……んだと想つ」「ちょっとつてどんな」

「例えば、ほら、鳩に餌やつたり、桜を眺めたりこいつして話したり、いろんなこと。辛いことに比べたら大分数は少ないけど、今は、幸せだよ」

幸せ、そんな言葉を、私は素直に相手に出せるのかな。

「考えなしだからあんま先のこととか考えないんだ。だから、今幸せだつたらそれでもう死にたいなんて思わなくなる。」

そう言つて、また笑つた。

私にも、彼女の言うような幸せを感じる事はある。けれど、それでも次にまた苦しいことがあるんだつて思つたら、幸せはただの苦しさの中継地点にしかなりえない。

「でも、次の瞬間にはすごく嫌なことがあるかもしれないのに」

「うん。でも、ないかもしねいし、もつといいことがあるかもしない」

私もそう考えたことはあった。でも前向きに生きるには私は弱すぎる、苦だ。

「幸せはこつか終わっちゃうけど、苦しきのもいつか終わるし。」

明けない夜明けは無い、そのぐらい知ってる。

でも無理なんだ。私は弱いくて駄目なんだ。生きられない。

「それにもつと、幸せであつていつ」とはいつぱいあると思つから  
さ、わざわざ死のうとは思わない」

そうだよ。死んだら、本当に何もできないんだ。

彼女は言葉どおり、幸せそうな笑顔でこっちを見た。とても温かい笑顔で。

「ごめん、なんかこっちがすつきりした。今までこんなこと誰にも言えなかつたし。一緒にいられて良かった」

私の話にこんなに真剣に答えてくれる友達は、今までいなかつた。うん、私もだよ。

そう言おうとしたのに、何故か言えなかつた。

ただ、突然涙が私の両目から溢れ出して止まらなくなつた。手で押さえた口元から嗚咽が漏れ、肩が痙攣するように震えた。

どうしたの、と驚いてこっちを窺う瞳が滲んで見えたけど、ひたすら私は泣く。

「もう止めて」

そう咽から搾り出す。

え、と言う小さな声が聞こえた。

「もう笑わないで。これ以上一緒にいたら、私は友達になりたくない。でももう無理なんだ、私には時間がない。死にたくない死ぬのが怖くなる！」

一度そう叫ぶと、止まらなくなつた。

「嫌だあああ、死にたくない、死にたくないよお」  
道を歩く人が、なにごとかと立ち止まって見てくるが、そんなのはもう気にならなかつた。

「一緒に生きてたい、一人で死にたくないよ。私も友達になりたいのに、なのにもう時間がないんだ、もう駄目なんだあ」  
本気でそう思つた。彼女と友達になつて、もつといろんな、くだらない話でも何でもいろいろ話したりして、見えない誰かに

懇願した。私の話をこんなに真剣に聞いてくれる人が、同じクラスに一年もいただなんて。

なんで今まで話さなかつたのだろう。なんでそんな人と一日しか一緒にいられないのだろう、それも最後の日に。

世界をとことん憎めば、死ぬのなんか怖くなくなると、半年前に思つた。そしてその計画はほぼ成功していた、筈なのに。筈だったのに。生きてさえいればそこにあるはずだつた、いろんな幸せとうものに気付いてしまつた。死ぬのが、怖くなつた。

それを教えてくれた彼女を憎んだりなんかしない。ただ、最後の日にそのことに気付いたということが悔しくて悔しくて、ただひたすら泣き続けた。

死にたくない死にたくないと叫ぶ私の周りに、小さな人だかりができるたが、だれも近寄ろうとはしない。でも、背中を優しくなで続ける手の暖かさに安心して、私は涙を無理矢理止めようとはしなかつた。

自転車を止めたままにしていた公園のベンチに戻つても、私はまだしゃくりあげていたが、それに愛想を尽かすこともなく、彼女は背中に片手を添えていてくれた。泣くな、と言われないのが嬉しくて、なかなか涙は止まらない。

ようやく一息ついて、私は右腕で田をこする。

「ありがとう。ごめん、いきなり泣いて」

「ううん。落ち着いた?」

うん、と私は頷く。やつと普段の呼吸法を取り戻す事ができた。

「やっぱり嫌だよ。死ぬのは」

そして、それだけ呟く。

世界の汚さを知つてから、心の中に分けの分からないもやもやしたもののがずっと居座り続けていた。そしてそれは、ときには吐き気をもよおすほどにもなり、私を数年来苦しめたが、今公衆の面前で思い切り泣き、少しそれは無くなつたような気がした。

でも、頭の中は、何だか霧がかかつたようにはつきりとせず、ぼんやりしていて、目の前の景色にも現実味が感じられない。向こうの方でボールを追いかける小学生達も、犬を連れて歩く老人も、木の下のベンチで本を読む若い女人の人も、木のざわめきや鳥の鳴き声という音でさえ、どこかとても遠いところにあるもののように見えた。

もうすぐ、私とはなんの関係もなくなる場所。

「空が高いよー」

突然、隣で同じ年の少女が言つた。

「うん」

小さく頷いて、私も上を見上げた。

数時間前と何も変わらない、青いきれいな空がどこまでも広がつてゐる。私がもうすぐ行くところ、のはずだ。果たして、そこに私

の居場所は在るのだろうか、と少し首を傾げた。

「空の上って、どうなってるんだるうね」

何気なく声に出した。

「そりゃあ、高くてさあ、そこからだつたらきっと全部見えるんだよ。海も山も誰でも、外国も」

何気 답변になつていないが、それはまあ別にいいか。

「でも、見てるだけじゃつまんないよね」

「じゃあ見に行つたらこいじやん」

へ、と間抜けな声を出して私は隣を見た。やっぱり彼女は笑っていた。

「だつて、空の上にいられるぐらいなら、行けるはずだよ。自分の好きなとこに」

「そりゃあうだうけど」

「そしたらさ、今まで知らなかつたとこにも、どこにでも行ける死んでからの話なのに、その日はむしろ好奇心で輝いて見えた。どこまでも前向きだ。

「でも、もし空にいくんなら、そしたら……」珍しく言いよどんでいる。何、と聞くと、やがて決心したように言った。

「また会つて話してくれないかな」

つまり、私は幽霊になるつてことですか。

信じていらないわけではないが、まさかそういうとは思わなかつたので、しばらく沈黙が続いた。

何か思い塊がすつと体から抜けていつたような感じがした。

いいじやん、のつてみるよ。

「いいけど、見えないかもよ」

「大丈夫」

何が大丈夫なのか分からぬが、彼女は嬉しそうに笑いながら「

スしてみせた。つられて私も指を一本立てて突き出す。

「あたし、よく分かんないけどさ、友達になれたかなあ

」

戸惑いがちに言ひのを見て、

「うん。だから、絶対会いに行く」

と、私は大きく頷いた。

さつきまで泣いてたくせに、もう笑っている自分に呆れたが、つくりものでない笑顔はとても気持ちよかつた。

確かに、今私は生きているのだ。かすんだ景色が色を帯びた。遠いところにあつた世界は、今は私を包んでいた。

陽が傾き、空が赤く染まるころ、私達は手を振つた。

「またね」

と普通に言つてくれたのが、とても暖かかつた。

夜の十一時ちょっと過ぎ。部屋の窓枠に頬杖を付いて、外を見る。黒々とした視界に、数え切れないほどの人々の家の小さな明かりが灯つていて、まるで星みたいだ。もちろん夜空には本物の星がある。人間のものよりはいくらか少ないけど。

今日は、半月だ。

未練がないなんて言わない。後悔してないなんて口が裂けても言えない。やり残したことだらけだ。勿論世界は汚いし、好きではない。

でも、この数時間で、そう嫌いでもなくなつた。

思えば、そんなに嫌なことだけでもなかつたかな。学校に行つても、楽しいと感じることはあつたし。ただ私は、死ぬ直前までそれに気付かなかつただけで。

私の思考つて、単純すぎる。

でもきっとそれが丁度いいのかもしない。晴れと雨がこうこう入れ替わるように、悪いことと良いこともすぐ入れ替わるものだから。それに生きてる間に気付けたんだから、それが最後の日であつ

ても私にしては上等だ。

でも、と私は立ち上がって電気を消しながら思つ。

私が世界に絶望して一人ぼっちで歩いていた時間があつたのは、確かだ。寂しくて寂しくて、いつもいつも孤独を噛み締めて、でも生きていくなんてこんなもんだと思った。幸せなんて見ようともせず、汚い部分だけを見つめて歯を食いしばつていた。表では笑つていたが、心中ではいつも泣いていた。

布団にもぐりこむ。まだ春は始まつたばかりだけど、寒くはない。できれば、そんな寂しい思いをする人がいなくなつてほしい。それでずっと生き続けるのは、辛すぎる。世の中、私みたいに単純な人ばかりではないだろうから、それだけじゃ救われない人もたくさんいるだろうけど。でも、折角こんなきれいな空の下に生まれたのだから、ほんの少しの幸せに触れて、そしてみんな心の底から笑えれば。きっと、人は人を殺さなくともよくなるだろう。一人ぼっちで泣くこともなくなつて、そうしたら、大嫌いが嫌いになるかもしれないし、嫌いがそうでもなくなるかもしれない。ちょっとは、この世界が好きになれるかもしれない。

視界には、月明かりに照らされる天井がある。いつもと同じ光景。私を包んでくれるもの一つ。

「おやすみ」

次に眼を開けば、いつもと変わらない朝田が私に触れるだらう。そんな夢を見ながら、私は眼を閉じた。

## 5・空の向い（後書き）

私の人生観だけの話になってしまいました……。それでも日を通して  
てくれた方、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7891b/>

---

空の向こう

2010年10月8日14時43分発行